

「お前たちは何者だ」

先主日の午後、「みんなの会」が行われました。聖書の言葉に聞き、参加者それぞれが自由に考え、意見を交わす時です。与えられる「正解」を求めるのではなく、対話する中で生まれてくる「思い」には、神の御心を深く探り当てる力があります。そして、ローマの信徒への手紙を読んでいた時、「聖書は時に、白黒ははっきりさせることを求めてくることがあるように感じる」との声が出ました。「イエス・キリストは『ありのままの私』を愛してくださるのではないのか」と。

確かに神は創られたこの世界を愛し、この世界に生きる一人ひとりのことを覚えて独り子イエス・キリストをお与えになりました（「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」ヨハネによる福音書 3:16）。そして、イエスはこの世で小さくされている者、疎外されている者たちの所へ行き、その人たちの「ありのまま」を認め、傍らに寄り添われました。「ありのままのあなたを愛してくださる」という事実は変わりません。

しかし同時にイエスは、「私に向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。天におられる私の父の御心を行う者が入るのである。」（マタイによる福音書 7:21）とも言われています。単に神を呼び求めるだけでは足りない、と。だから、「すべて重荷を負って苦勞している者は、私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。」（マタイによる福音書 11:28）と言われた後、続けて「私の軛を負い、私に学びなさい」（マタイによる福音書 11:29）と言われるのです。背負っているものを全て降ろすことがすなわち「楽になる」ことではなく、イエスが歩まれる道を共に歩むために「新しく背負い直す」時、「あなたがたの魂に安らぎが得られる」（マタイによる福音書 11:29）のだ、と。

その意味において、聖書は、そしてイエスは、神は、「私を選ぶのか、それとも他を選ぶのか」という二者択一を迫るものでもあるのです。自分にとって都合の良い時だけ神に頼るのではなく、人生全てを神と共に歩む方向へと切り替えることを期待されています。

「神は、パウロの手を通して数々の目覚ましい奇跡を行われた」（使徒言行録 19:11）との評判を聞いて、「自分も同じことをして評価されたい」と願う者たちが現れたと聖書は記しています。「悪霊に取りつかれている人々に向かい、試みに、主イエスの名を唱えて、『パウロが宣べ伝えているイエスによって、お前たちに命じる』と言う者があった」（使徒言行録 19:13）と。彼らは弱さを覚えている人のためではなく、自己評価を上げるために「形だけ」真似ようとしてしました。

ところがその試みは、追い出されるはずの当の悪霊にさえも笑われる始末です。「悪霊は彼らに言い返した。『イエスのことは知っているし、パウロのこともよく知っている。だが、一体お前たちは何者だ』（使徒言行録 19:15）。形だけ真似たところで、芯が入っていなければ何の意味も無いどころか、却って状況を悪くすることをこの事実は教えてくれます。

改めて、「天におられる私の父の御心」は何なのか、問い、考えることが大切です。

神はエレミヤを通して、「あなたがたが本当にあなたがたの道と行いを改め、本当に互いの間に公正を行うなら、この場所で、寄留者、孤児、寡婦を虐げず、罪なき人の血を流さず、他の神々に従って自ら災いを招かないならば、私はあなたがたをこの場所に、あなたがたの先祖に与えた地に、いにしえからとこしえまで住まわせる。」（エレミヤ書 7:5-7）と言われました。「互いの間に公正を行う」こと、「寄留者、孤児、寡婦を虐げ」ないこと、「罪なき人の血を流さ」ないこと。少なくともこれらは神の御心と言ってよいでしょう。そしてもし、この神の御心が地上で実現していないとするならば、私たちがどのように生きることが「神の思いに応える」歩みとなるのでしょうか。

「一体お前たちは何者だ」との問いは、形を変えた「神を選ぶのか、それとも他を選ぶのか」との問いです。「私たちは神に従う者だ！」と胸を張って答えられるように、私たちも自分の歩みを振り返り、改めたいと思うのです（「主よ、あなたの言葉どおりに私を生かしてください。」詩編 119:107）。

